

使い切れない農地に
菜の花、ハス、ビオトープ

町の人たちの 力も借りて 農地をつなぐ

福島県二本松市・布沢集落

文・写真=編集部



「布沢の環境を守る会」会長の菅野正寿さん（右）と副会長の大橋要次さん。大橋さんは菜の花を咲かせてミツバチを飼う



菜の花を咲かせてハチ飼いになった

集落の中心から南東方向へ2 kmほどの東和小学校・中学校へと続く通学路。布沢集落のいわばメインストリートを、子供たちが柵田を見下ろしながら通う。春、新学期が始まる頃、この道の土手に菜の花が咲き誇る。「布沢の環境を守る会」が多面的機能支払の活動の一つとして増やしてきたものだ。

会の副会長を務める大橋要次さん（71歳）は、昨年春から家の前の畑にも菜の花を咲かせるようになった。郵便局を定年退職し、本格的に和牛繁殖に専念しよう

写真のミツバチは西洋ミツバチ



昨年春、大橋要次さんの畑に咲いた菜の花
写真提供=菅野正寿



野良のアートの作品の一つ

と思った矢先に起きたのが2011年の原発事故。畑にゼオライトやカリ肥料を散布して放射性セシウムの吸収を抑え、再び自分で栽培した牧草をエサにできるようにになったが、3年前、体を壊して牛飼いは引退することにした。それで使わなくなった牧草畑15a分に菜の花のタネを播いてみたのだ。

南向きに傾斜した家の前の畑は南も東も開けていて、じつに日当たりがいい。取材に訪ねたのは2月初め。雪で白くなったままの向かいの斜面とは別世界だ。家のすぐ裏は昔からの公園で、サクラの木が何本か植わっている。

「この地形なら分蜂した日本ミツバチが入る。巣箱を置かせてくれないか」。一昨年、ミツバチを飼う牛飼い仲間にも頼まれたのがきっかけで、大橋さんは自分も趣味の養蜂を楽しむようになった。牛飼いがハチ飼いになり、牛のエサの牧草はハチのエサ（蜜源・花粉源）になる菜の花に変わった。ハチミツを売る気はないし、菜の花がおカネになるわけではないが、サクラの薄いピンクに菜の花の黄色が組み合わせると春爛漫の景観になった。

「いま、これつくってんだ」。そう言って案内してくれたビニールハウスでは、巣箱を製作中。材料のスギ板は、ハチに嫌われないよう半年ほど雨ざらしにしてスギの香りを抜いたもの。養蜂のプロがつくったという市販の巣箱を手本に、板の表面が黒っぽくなるようガスバーナーで焼いてみた。